



2018. Nov.
第 21 号

一般社団法人日本演出者協会
協会誌「ディー」



特別鼎談『出会いは意識を変える』 シライケイタ×小林七緒×日澤雄介

Contents ■

- | | |
|---|-------------------------|
| ■ 特別鼎談 シライケイタ×小林七緒×日澤雄介
『出会いは意識を変える』…… 2 | ■ 総会報告…… 14 |
| ■ 演出家・俳優養成セミナー 演劇大学 2018…… 6 | ■ 部会だより…… 14 |
| ■ 国際演劇交流セミナー 2018…… 6 | ■ 理事会報告…… 15 |
| ■ 日本の戯曲研修セミナー 2018…… 8 | ■ 戯曲の出版社に突撃取材! 白水社…… 16 |
| ■ 若手演出家コンクール 2018 中間報告…… 8 | ■ 新入会員紹介…… 18 |
| ■ 演出者と法律…… 9 | ■ 退会・訃報…… 19 |
| ■ アンケート「演出者の仕事」…… 10 | ■ 事業担当者名簿…… 19 |
| ■ 各地域活動通信 民間小劇場特集…… 12 | ■ 台湾通信「旅する演劇のすすめ」…… 20 |
| | ■ 編集後記…… 20 |

一般社団法人日本演出者協会 協会誌『D』(ディー) 第21号 定価=無料 2018年11月1日発行 2008年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】流山児裕(理事長) 【編集人】秋葉由美子(広報部長) / 栗原秀一(副部長) / 大西一郎(担当理事) 【編集委員】篠崎光正 / 緑川憲仁 / 藤間健 / 中村ノブアキ / 五戸真理枝
【発行所】一般社団法人日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F(〒160-0023) 電話03-5909-3074
【編集・制作】一般社団法人日本演出者協会広報部 協会誌『D』編集委員会 【題字】千田是也『Marionetto』より 【印刷所】有限会社一光堂印刷
【表紙デザイン】前嶋のの 【表紙・鼎談写真】吉里麻衣 【鼎談編集・本文デザイン】吉田奈穂

出会いは意識を変える

今号は、常務理事を務めるお三方にお集まりいただき、日本演出者協会について存分に語っていただきました。

参加した事業の想い出、現状への想い、そしてこれらについて。

鼎談は盛り上がり、長時間に渡って熱いトークが繰り広げられました。

聞き手…秋葉由美子・栗原秀一

(取材…2018年8月2日)



演劇大学は育成事業の裾野！ 地域の演劇人の自立を徹底サポート

—日本演出者協会に入会する前と後とで、協会に対するイメージは変わりましたか？

日澤 僕は若手演出家コンクールがきっかけで入会して、その後すぐに中津川の演劇CAMPがあったんです。最初にそういう大きなイベントに携われたことで、日本演出者協会が都内中心の団体というより、全国規模の団体だというイメージを持つことができましたね。

シライ 演劇CAMPって？協会の事業なの？

小林 そう。演劇大学の大きい版と思ってもらえばいいかな。岐阜県の中津川で、2009年から2013年まで5年間やってたの。

日澤 あれはおもしろかった！閉校した小学校にみんな泊まって、歌舞伎小屋で舞台やったり、喫茶店でリーディングがあったり盛りだくさんですね。

小林 新しく参加した人たちは交流会に参加したり、ちよつと観光に行ったりしてたけど、私は小屋付きだったから一歩も外に出られなかった(笑)。

一同 (笑)

日澤 その後協会の事業に参加したのは…何年だったっけ、岩手の演劇大学に一回行ったかな。

小林 そうそう！演劇大学inきたかみ2014で「芝居つくり講座」を日澤さんに頼んだことがある。

—演劇大学のオフアワーはどういう形で協会に来るんですか？

小林 最近多いのは、どこかの演劇大学に参加して、自分の地元でもやりたいという人からですね。演劇の環境があまりよくない、つまり高校演劇はあるけれども、卒業後に演劇を続けられる環境がない、地元で劇団はあるけれど劇団同士の交流があまりないなど、もっと風通しをよくしたいと思っている地域の人が手を挙げる人が多いかな。た

だ最初は分からないから、全部協会がお膳立てしてくれると思ってるところがほとんど。だから、まずは地元で実行委員会を作って、本当に頑張れる体制を作ってから呼んでください、そうしたらいくらでもこちらから人材を送りますって話をするの。演劇大学を3年くらいやってからそこで基礎体力がついて、その後自分たちで事業を回していけるようになるから、というのが全国共通になってます。

日澤 じゃあ基本的には、体力がつくまで支援するようなサポート事業ということなの？

小林 そう。育成事業の一番裾野！演劇大学は、やってみたいと言ってきた人に、まずはやり方、実行委員会の作り方から教えて、「この都市はこういう講座をやったよ。あなたたちは何に困ってるんだい？」って。たとえば、高校生たちに高校演劇だけでなく他のものもさせてみたいだとか、シニアの演劇をやってみたいけどそういう場がないとか、困っていることはさまざま。使える劇場がないから小さいスペースやカフェで芝居をしたいんだけど美術をどうしたらいいか分からないと困っていたら、美術講座で講師と一緒に考えてみる、とか。

日澤 なるほどねえ。

小林 あちこちの地域でやってみたいという声が上がっているけど、年間そう何本もできないので、待ってもらっている状態です。

—シライさんは入会后、どんな事業に携わったんですか？

シライ 僕も函館の演劇大学に行きました。函館は入会前にもワークショップに呼ばれて行ったことがあるんです。大学時代の友人が函館にいたことが縁となつてね。元々は協会とは関係なく自分たちでワークショップを企画したりしてたんだよ。

日澤 じゃあそのワークショップにもう一つテコ入れて演劇大学を函館でやりたいと？

小林 ワークショップをやってたかな。

シライ 今はもうやってないの？毎年やってて、僕それに呼ばれて行ってたんだけど。

小林 残念ながら……。とあるホールで、演劇をやりたい若者たちをサポートしようと、ホールの職員さんたちも協力してワークショップや照明講座、音響講座を何年もやっていたのだけど、状況が変わって演劇事業が無くなってしまったの。

一同 えっっっ？！

小林 長く続いている劇団はあるし、新しく出来た劇団もあるけれど、地元を離れていく若者も多くて、活動を続けるのは難しい。でも、そんな現状を見て「若手があまりにも元気をなくしているから、何とか演劇大学を開きたい。今やらなかったら、函館の演劇が終わってしまう」ともう一度立ち上がった大人がいたの。その熱い思いに、市や財団も協力してくださって、演劇大学in函館につながった訳です。

日澤 そうということなんだ。

つながっていない劇団同士を「一緒にやろう！」とつながっちゃうのが演劇大学の強み

— 演劇大学で関わった方々のいろいろな想いに触れているんですね。これらの演劇事業の魅力をどんな風に感じていらっしやいますか？

小林 ものすごく簡潔に言ってしまうえば「出会い」ですね。地方は劇団と劇団があまりつながっていないですよ。そこを「一緒にやろう！」ってつながっちゃうのが演劇大学の強みです。だって地方の事情なんて、言葉は悪いけど知ったこっちゃない(笑)。たとえばAさんがトップで抑えてて下の人は言いづらい、みたいなことには一切頓着せずに、どどんツツコンでいってかき回す。あとは、横のつながりですね。どこかの演劇大学に参加した人たちがそこにノウハウを聞く。それが盛岡から秋田、秋田から新潟、新潟から山形という具合に、東北はだんだん糸が繋がってき

自分も歴史の一部として生きている。

他者と自分という関係を意識するようになったことが大きい。『シライケイタ』

ていて、私は今それがおもしろいなあと思って演劇大学の担当をしています。

日澤 東北はまとまらないっていうイメージがあるけど。

小林 そう。でもフットワークの軽い人たちをつないでいければ意外といける気がする。特に実行委員をした人たちは受講生として参加できなかったから、よその演劇大学を受講するぞ！って車で大挙して行ったりね。

シライ 僕が仙台のワークショップに行ったときは、山形の人だと思っけど来てたなあ。函館にも他県から来てたし、他にも結構あったから、飢えてるんだなあと思った。

日澤 我々は仕事として演劇に携わっているから気づかないけれども、やっぱりやりたい人が多いんだろなあというの、協会の事業をやるとすごく思う。観るだけではなくて演劇をやる魅力を知っている人がたくさんいるなあというの、正直この協会に入ってやっと分かったこと。僕なんか仕事にすることしか考えずにやってきた人間だから、そういう意味ではおもしろいですね。

小林 そもそも演出家って、一つの演劇を創る単位の中で一人しかいないから、ここで知り合わなかったら永久に他の演出家と知り合わないよね。

シライ ホントそうですよね。

小林 ところが演出者協会に入って事業に関わったり参加したりすると、こんなにいるのか演出家！って思うほど会える(笑)。だからちよつと興味があつて入ってみようかなと思つたら、とりあえず入ってくれればいいなあ。何が楽しいって、まず事業に参加できます。いきなり講師は無理かもしれないけど、演劇大学の他にも、「日本の戯曲研修セミナー」や「国際演劇交流セミナー」などいろいろな事業の情報も入ってくるし。

日澤 でも地方よりは東京の方が事業が多いから、もつと地方でも事業を増やせたらいいんだけど。

小林 そうね。一回演劇大学をやったところから再開希望もあるけど、まだやっていないところがあるから待ってもらっているの、次は自分たちでリーディングをやってみない？など、何か提案していければいいよね。

日澤 地方で自主事業をするのって、やっぱり予算的に厳しいの？

小林 どうだろう。地方によって事情はちがうと思うけど、人件費や会場費を考えたら、助成金を受けられないとあの参加費では難しいのが現状だね。助成金に頼らずに自主事業ができればいいんだけど……。

日澤 ちよつと矛盾してるかもしれないけど、お金ではないつながりが演出者協会の魅力だと思う。けれども事業として成り立たせるにはお金にしなければならぬ。我々は演出を仕事としているわけだから、演出家の地位向上だったり、職能としての演出家というものをきちんと担保できる団体にしたいという思いもある。そのためには演劇というものをもっと振興させなければいけないから、普及活動にも力を入れなければいけないし……。そこら辺のバランスがうまく取れればいいなあ。

— 地方の協会員の中には、入ったはいけどその後も事業に関わるのがなくてどうしていいかわからない、という人も結構いると思うんです。

小林 最初は難しいと思うんだけど、とにかく何か一つ参加してみない？ どれか観に来てみない？ って思います。一番近いところでもいいから。たとえば中国地方の方だった



シライ ケイタ

劇作家・演出家・俳優。温泉ドラゴン代表。一般社団法人日本演出者協会常務理事。1998年、蜷川幸雄演出の「ロミオとジュリエット」パリス役で俳優デビュー。2011年より、温泉ドラゴンの座付き作家・演出家として劇作と演出を開始。『若手演出家コンクール2013』において、優秀賞と観客賞。2015年、韓国の密陽国際演劇祭において、『birth』が戯曲賞。第25回読売演劇大賞において、杉村春子賞。2018年度より、セゾン文化財団シニアフェロー。



日澤 雄介 (ひさわ ゆうすけ)

演出家・俳優。劇団チョコレートケーキ主宰。一般社団法人日本演出者協会常務理事。純度の高い人間関係を表出させる演出により、一方的な「目撃」だけではない劇空間を表出することを目指している。2014年と2017年には読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。近年の演出作にホリプロ『リトル・ヴォイス』トム・プロジェクト『Sing a song』他。

楽しけりやいいという考えは、俳優から演出家になったときに捨てた。【日澤 雄介】

てあまりにも稚拙だなあと感じたチームもあった。これは多分、芸術行為に対する大きな誤解と、あとは知識のなさ……が深刻だと僕は思いましたね。

小林 私も知識のなさがすごく大きい気がしていて、これはすごい！っていうものに触れていないような感じがする。だから演出の要求水準が低い、ということがあるんじゃないだろうか。

シライ もちろん多様な価値観、多様な演技スタイルこそが日本の演劇界の魅力でもあるんだけど、それにしても根拠のない多様さと言うか……。そんなに古い歴史じゃなくいいけど、現代演劇の歴史も演技のやり方も全く知らずに、独自に出てきて、自分の友だちだけを喜ばせて、その延長でコンクールに出てきている。これはどうなんだろう……って思いました。

——知識不足という話が出ましたが、現場で感じる問題というところなことがありますか？

シライ 現場……プロデュース公演なんかで毎回違う俳優たちと付き合っていると、まず演技者それぞれが使う言葉の意味だったり、演技に対する基本的な考え方のズレを合わせる場所から始まる。まずそこから！必ず！よいドで始められる環境ってホントに少なく、ほとんどの現場でまず「演技のルールはここからスタートします。これを僕は大切にしています」という話をしなきゃいけない。最初の何週間かはそこにかかる（苦笑）。これをどうにかしたいなあと思いますね。たとえば日澤さんと僕は、演劇的な出自も育ちも全く違うんだけど、そんなにズレないですよ。それは多分七緒さんもそう。

小林 そうだね。何を大事にするか、だよ。演劇の多様性を面白がりがらも、それぞれが使う言葉や基礎知識は一緒！っていうのいいなあって思うよね。

世界が広がり、意識が変わった話すことで自分の核がクリアになっていく

——いろいろなお話を聞かせていただいて、人との出会いが結構キーワードだったと思うんですが、皆さんが協会に入ってから影響を受けたのはどんなことですか？

日澤 僕はまず、若手演出家コンクールに出て、それまで知り合う可能性のなかった人たちに自分たちの舞台を観てもらえるようになって、すごく広がりましたね。そこから仕事面でも広がったし。そうするとその人たちのお芝居も観るようになるので、見聞を広められたことも大きい。僕は小劇場出身で知り合いの演劇しか観ていなかったから、元々不勉強だったもので、いろいろな劇団、作品を観に行くきっかけになったのは大きいですね。

シライ その前はあんまり観てなかったんだ。

日澤 観てなかった。お金なかったからねえ。それこそ手取りで月12万とか15万で生活してたから。劇団に持ち出しもあったし、バイトして稽古して、チケット買ってくれそうなお客さんのところを観に行くので精一杯だったよ。

シライ 僕は自分の周りの仲のいいやつとだけつるんでいればいいやと思って、今考えれば尖っていたのかもしれない。けど、和田（喜夫）さんや流山児（祥）さんに誘ってもらって、知らなかった人たちとも出会えた。こういう協会の活動を代々やってきている大人がいるんだって知ったことも目から鱗が落ちたし。演劇は、そのときの即時性で、瞬発力で勝負するものだとは思っていなかったから、自分が歴史の一部として生きているという意識があんまりなかったからね。他者と自分という関係を意識するようになったことは大きかったかな、協会に入って。

日澤 独りよがりじゃなくなったっていうのはあるね。世

日本演劇の特徴である多様性を保ちつつ、基本的な考え方のズレをなくしたい

——前号で「若手演出家コンクール」を取り上げましたが、皆さん審査員として参加されていかがでしたか？

シライ うーん……正直、あんまりレベル高くないなって思っちゃったんですね。技術的に未熟であることはしょうがないけど、演劇とか演技とはなんだということに対し

小林 他のセミナーでも、個人的なものでもよくて、「勉強会を開きたいんですけど、誰か講師できてくれませんか？」とか。それは自主事業になってくるけど、そういう小規模なものでもいいんですよ。平たく言うと、来たら友だちでできるよ！ただ入って、送られてきた『D』を読むだけじゃなくて、思い切って何かに参加してみてほしい。ああでも、九州の山田恵理香さんが『D』熟読！すごく情報が詰まっているから、この冊子をもらせるだけでも結構財産！」って言ってましたよ。

——そういうご意見を聞くと、広報部一同、励みになります！

間みたいなものからもうドロップアウトしたもんだと思っ
ていたけど、そうじゃないよね（笑）。

シライ そうか、人はこう言う風に自分の創るものを見て
いるのかとかさ。だからここが評価されているんだ、だか
らここが批判されているんだということもだんだん分かっ
てきた。そうすると今度は評価されているところを伸ばそ
うとか、批判されているところを小さくしてみようとか、
人におもねることになっていくじゃない？ これもまた本
末転倒になるしね。今まで好き勝手に創って、勝手に評価
されていたものがそうじゃなくなつて、さあこの大人たち
とまだ見ぬ観客たちにとって何がいいのか？ つてぐるぐる
回つて、もつと難しくなつたけど。そんなことない？

日澤 僕はそこまで頭回つてないかも。元々俳優だったか
ら楽しけりゃいいと思つてたけど、俳優から演出になつた
ときに、楽しければいいは捨てたから。そういう意味では、
もう変わらないかな。評価は、聞かないように聞くから。
シライ 結局そうするしかないよね。

日澤 あんまり褒められたくもないし、けなされたくもな
いし、褒められたいしけなされたい、みたいな？

一同（笑）

小林 この二人は結構褒められたりする人たちなので、も
う少し参考になる一般意見を。

一同（笑）

小林 演出者協会に入ったら、それこそ名前しか知らな
かったような先輩方とも一対一で喋るようになるでしょ
う？ 会議に出たり事業に関わっていると、私はこう思い
ますつてきちんと話して聞いてもらわなきゃいけない。そ
れをずっと続けていると、何を考えているのかっていう自
分の芯が固まる気がする。これはとても好きで大切なも
の、ここは絶対許したくないところ、という核がクリアに
なつてきて、それを大事に喋っていると、協会の諸先輩方

は若手の話でもちゃんと聞いてくれる。そこがすごいなこ
の人たちっていうのはずっと思ってます。そんな先輩方と
出会って、話ができるようになったことが一番の財産か
な。演出家として第一線で働いてて全く暇のない先輩方
が、隙間時間を見つけては協会の仕事をしているのを見
てきて、そうか、演劇業界はこうやって回っていくんだつ
ていうことに直に触れられたのは、すごくラッキーだったと
思います。

新企画の提案、大歓迎！ 実現に向けたサポート体制も協会の魅力

—最後に、今後の演出者協会がこうなっていけばいいなつて
思うことを聞かせてください。

シライ やっぱ若い人に入ってきてほしいよね。

日澤 そうだね。あとは、さっきも出たけど、助成金に頼
らなくてもやっていける自主事業を増やしていければ。

小林 そうした方がいいとみんなが分かっている、じゃあ
どうする？ つて話になるじゃない？ そこで今出ているの
が、俳優ブラッシュアップセミナーという案。

日澤 たとえば、俳優養成の年間カリキュラムを作つ
て、名うての演出家が演出する、をセットにしたらどうだ
ろう……？

シライ 確かにそれは今までなかったねえ。

日澤 たとえば宮田組とかシライ組とか作つて、最後に公
演やりますつていうのであれば……？

小林 演出受けたら人、来ると思う！

日澤 でも問題なのが、最後に公演やりましようという
きに、脚本が……。既成の本は男女比とかあるじゃない。

シライ そんなの男女を入れ替えて……つてちょっと待
て！ 本書きだからつて僕、その新作書くとかは無理だ

よ！

一同（爆笑）

日澤 いやいやそんなことは（笑）。

シライ そしたらコラボレーションすればいいんだよ、劇
作家協会と。

日澤 それいいかもね！

シライ 演出者協会の俳優セミナー出身ですつて、俳優が
一つの肩書きとして名乗れるように、そこまで成長してい
けば、一つの目玉になるかもしれないよね。

小林 そうかもね。若手だったらプロフィールに書きたい
人もいるんじゃない？ 俳優セミナーで宮田慶子さんの演
出受けました、とか。

シライ たとえば毎年3人とか4人とか、今年の演出者協
会俳優セミナーの講師陣ですつて発表して募集をかけて
いったらいいんじゃない？

—たとえばそういうことは常務理事会などで話を発展させて
いくことはできるんですか？

シライ もちろんできるよ。

小林 できるできる！

—それに携わりたい協会員を募集してみるのは？

小林 いいと思うよ。

—こんなことやりたい！企画を形にしたい！と思つたら、実
現に向けて提案できる。この環境をぜひ活用して、素敵な企
画をどんどん実現していつてほしいです。ね。
本日はありがとうございました！



小林 七緒（こばやし ななお）
演出家・俳優。流山児★事務所所属。
一般社団法人日本演出者協会常務理事。
2000年、文化庁在外研修員として1年間カナ
ダ留学。帰国後「若手演出家コンクール2001」
で最優秀演出家賞を受賞。俳優の持ち味を十二
分に生かした緻密でテンポ感のある演出には定
評がある。日本演出者協会では、各地でのワー
クショップ「演劇大学」を担当。主な演出作品
に『アストリイズ』『標的家族！』『嘘みつい
た娘』『ピアフ〜私は何も後悔しない〜』など。

演出家・俳優養成セミナー
2018

演劇大学
in
やまがた

2018年9月21日～24日

会場：山形市民会館

講師：佐野バビ市、大河原準介、平塚直隆、後藤ひろひと、加藤ちか、宮田慶子、田畑真希、和田喜夫

制作：一般社団法人日本演出者協会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

共催：山形市民会館管理運営共同事業体

後援：山形市、山形市芸術文化協会、山形市教育委員会、山形新聞、山形放送、産経新聞山形支局、毎日新聞山形支局、朝日新聞山形総局、読売新聞山形支局、株式会社山形テレビ、株式会社テレビユー山形、さくらんぼテレビ、株式会社エフエム山形、株式会社ダイバーシティメディア

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」



山形の演劇はここからは一歩ずつ自らの力で歩いていくこととなります。壇上の当事者の一人として右記の取り組みに勇気をもって取り組むことをこの場を借りて再度約束し、報告いたします。

【報告Ⅱ吹雪ヒュン】

今年度の「演劇大学inやまがた」は「ほら、演劇って楽しいんだよ！すこだまおもしろい4日間」をテーマに開校し、7講座（A実践・B戯曲・C体験・Dインプロビゼーション・E舞台美術・F教養・G身体表現）が行われました。また4日間の中に特別企画やシンポジウムなどの取り組みを詰め込み、講座・企画すべて合わせて延べ495名の方に参加いただき、大いに盛り上がりしました。

滞在型演劇大学・特別企画「ちゃんぽん」は地元山形の演出家・俳優・スタッフで製作され、和田喜夫事務局長に監修していただきました。期間中、2回上演された公演は、受講生・講師陣、公演を観にこられた一般のお客様にも評価をいただきました。

成果発表会での発表は、A演劇実践・B戯曲・Dインプロビゼーションの3講座でした。どの発表も充実の表情を浮かべる受講生の姿が印象的で、特に戯曲講座の発表リーディング3作品はどれも面白く、豊かな実りを感じました。

またシンポジウム「山形演劇サミット」これからの山形演劇を話そうは、山形県内の4地区の代表者が集い、地域の課題を語り合い、今後の協力を約束することを目的に開催されました。その中で大河原準介講師の愛ある厳しい指摘を皮切りに、受講生や他の講師陣からは次々に激しく厳しい意見・指摘・提案・激励が飛び出し、白熱した雰囲気となりました。結果、壇上が上がっていた各地区代表の4人は今後に向けた幾多の提案や試みを履行することを約束しました。シンポジウムの成果として「各地区を横断的に開催する交流会議の継続開催」や「公演・客演情報交換の交換用ツールの作成・発展」などがその場で合意・確認され、後日、宣言文の形で演劇大学inやまがたHP上に公開することとなりました。

国際演劇交流セミナー
2018

台湾特集

「ドキュメント演劇」
自分史から着想する
6日間

2018年7月17日～22日

会場：芸能花伝舎

講師：汪兆謙（Jhao-Cian Wang）、許正平（Cheng-Ping Hsu）

シンポジウムパネラー：流山児祥、大橋宏

コーディネーター・翻訳：E-RUN

通訳・翻訳：陳彦君、横山光大

担当：柏木俊彦、山上優、佐川大輔、流山児祥

制作：一般社団法人日本演出者協会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」



映像、食べ物、歌、ニュース報道或いは事件」を用いて創作をする「ドキュメント演劇」。そのプロセスを体験するというのが今回のセミナーの目的であった。

今回の台湾特集では、まず、『見えない東京』をテーマに、参加者には事前に二つの課題が出された。一つ目が、自分にとっての「見えない東京」を撮影しておく。二つ目に、自分が生まれてから現在に至るまで、自分にとって一番重要な年代記事（できごと）を自分の言葉で書いてきてもらう。この都市リサーチと個人史ドキュメントを用いながら、20～60代の参加者14名と実験的な創作が行われ、最終日は1時間近い「ドキュメント演劇」作品の発表を行った。

セミナー期間内では、レクチャーとシンポジウムも行われた。レクチャー「台湾南部の演劇の現状」では、講師2名から台湾の演劇は発展途上の段階であることが伝えられた。「ドキュメント演劇」の活動とは別に、彼らの所属する阮劇団は敢えて台北から離れた嘉義に拠点を置いて、消えゆく言語である台湾語での演劇作品を積極的に上演。加え、嘉義県パフォーミング・アーツセンターでは「草草戲劇節（演劇祭）」を主催。地域市民の観劇環境の整備、青少年が舞台上上がる機会を創出。この活動も彼らにとって大切な活動のひとつ、との言及があった。シンポジウムでは、「これからのアジアの演劇」をテーマに、流山児祥氏、大橋宏氏がパネラーで登壇。講師2名と共に、異なる言語、習慣を持つアジア演劇人との交流や創作の楽しさ、厳しさ、そしてその意義についての意見交換が行われた。

【報告Ⅱ柏木俊彦】

台湾の南部、嘉義を拠点として活動する演出家、汪兆謙（ワン・ジャオチエン）氏。同じく台湾南部の台南で活動する劇作家、許正平（シュー・チェンピン）氏。北京語、台湾語という二つの言葉が混在し、国とは何か、個人の存在意義を模索する講師たちが、自分が生まれた場所の物語とその物語に関する「ドキュメント（写真、

国際演劇交流セミナー

2018

韓国特集

パク・クニョン演出
ワークショップ
5日間

2018年8月22日～26日

会場：兵庫県立ピッコロシアター中ホール

講師：パク・クニョン（朴根亨）

通訳：洪明花

翻訳：石川樹里

担当：島守辰明、金子順子、山本つづみ、井之上淳

制作：一般社団法人日本演出者協会関西ブロック

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

共催：兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアター

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

2018年8月22日から26日までピッコロシアター中ホールにて、韓国からパク・クニョン氏を迎えて演出ワークショップが開催された。事前にパク氏とは「演出家、またはこれから演出を目指す若者を対象に特化したワークショップを」とお願いしていた。

集まったのは東京からの参加を含めた20代から60代までの30人強。課題台本はパク氏の名作『そんなに驚くな』。初参加も多い参加者たちは台本を熟読して備えた。1人1人の自己紹介から始まったワークショップ。そのあまりに個性的な顔ぶれは関西ならではののだろうか。パク氏の引き寄せるものだろうか。5人の演出家が演出の考えをプレゼン。各チームに役者たちが手を挙げて、これもそれぞれに個性的な5つの座組が誕生した。

パク氏の「台本そのものを使わずに、台本に書かれていない場面を作る」「もともといない登場人物を出して良い」「演出家は役者たちそれぞれの考えを生かすこと」という掛け声のもと、創作が始まった。短い持ち時間は台本を書くことは出来ない。ほぼ即興しながらも、役者たちの思い、演出家の考えとがせめぎ合う。直ぐにその場で披露。一つ一つの発表ごとに、観ているものから意見が投げられる。そしてパク氏の意見。これが、回を重ねることに準備時間をさらに短くされていくわけだが、毎回話すパク氏の意見がまさに演出論の基礎、演劇論の基礎を形作っていく。

演出は俳優という表現者を搾取するのではなく、俳優を生かすために仕事をする

・演劇は「生きた」人間がいれば良い

・舞台にたつ俳優は己の魂を考えれば良い

・漠然とではなく具体的に

・日常でも良いが『詩』であるべき

最終日に発表が行われて意見交換、パク氏のレクチャーで全日程は終了した。

8回繰り返される創作には、「演出家を変えても良い」「今までと全く違う場面もあり」など毎日刺激が満載の五日間だった。

台風による鉄道運行全面休止というアクシデントもありながら、会場使用時間をシアター側も延長して良いという配慮をいただきながら、各参加者が厳しく向き合い、創作の展開、変化を求められる、台風に負けぬ濃密なワークショップとなった。

【報告】島守辰明



国際演劇交流セミナー

2018

スイス特集

「二次元を舞台化する」
～演劇的な置き換えの
ダイナミズム～

2018年8月26日～30日（東京）、9月1日～6日（札幌）

会場：ゴコクジスタジオ（東京）、扇谷記念スタジオ ZOO（札幌）

講師：ドリアン・ロセル（Dorian Rossel）、デルフィヌ・ランザ（Delphine Lanza）、加藤ちか

通訳：浅井宏美、山上優

担当：山上優、柏木俊彦、広田豹、前田透、浦竜也、佐々木治己

制作：一般社団法人日本演出者協会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

2018年スイス特集は、演劇上演のために書かれた戯曲でないものを題材に舞台作品を創作するスイスのカンパニー Cie STT（劇団スーパードット）から講師2名を招きワークショップ、参加者によるプレゼンテーションを行った。ジュネーブに拠点を置きながら、フランスでの公演活動も多い彼らの劇団では、ヨーロッパで特に評価の高い日本人漫画家で昨年他界した谷口ジロー氏の作品「遥かな町へ」、また小津映画「東京物語」の舞台の成功が大きい。想像だけで日本を舞台にした作品を創るアーティストと日本の演劇人との出会い、また近年日本で大きなマーケットを持つ、2.5次元演劇と呼ばれるジャンルとは全く異なるアプローチで「二次元を舞台化」する彼らの手法を体験する、というのが企画の意図だった。

セミナー初日は、彼らの二つの作品を紹介するビデオ上映会からスタートした。今回参加希望者は出自も多岐に渡り、演出家をはじめ、振付家、ダンサー、俳優など年齢にも幅があり、大幅に定員を超えた。東京では受入れを増やし17名の参加者で開催。舞台美術家の加藤ちかさんにはオプザーバーとして複数回来て頂き、外からの視点で話をさせて頂く。最終日は、書道家の方が発表を見て発言して下さるなど、活発な意見交換会となった。ワークショップではグループ単位（コース）の即興が繰り返され、平台や音響設備のある稽古場で様々なアイデアの涌出をみることが出来た。講師が初日に語った、「私たちのやり方を紹介して皆さんにやってもらうのではなく、エクスチェンジしたい」という目標は十分達せられたのではなからうか。

札幌会場は、劇場空間の扇谷記念スタジオ ZOO。空間の持つ力を改めて感じながら、現地実行委員の仕込みを整えての受入れ体制にも感謝。進行は東京と同様の流れだが、新しい参加者10名と舞台空間、別の土地という違いが生む演劇の生々しさを実感。参加者からは、毎日皆が変化していく様子が素敵で刺激的な体験だったとの声があった。

最終日9月6日早朝、北海道胆振東部地震発生、演劇が今と向き合うもの、であることを直視。（地震関連報告は会員DM同封「言葉の広場」をご参照ください。）

【報告】山上優



日本の戯曲研修セミナー
in 東京

2018年9月8日～30日

会場：本多スタジオ、芸能花伝舎

リーディング演出：別役実『カンガルー』 森田あや、唐十郎『唐版・風の又三郎』 笠浦静花

ゲスト：小林勝也、渡辺えり、大久保鷹、高取英、清末浩平

シンポジウムゲスト：中津留章仁、坂手洋二

プロデューサー：丸尾聡

プロデューサー補：小林拓生

ファシリテーター：川口典成

企画・制作：一般社団法人日本演出者協会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

別役実&唐十郎
を読む！



最終日は全国に爪痕を残した台風24号の影響もあり、リーディングやシンポジウムを切り上げなければならなかったが、自然災害が続くさなか怪我人も無く全日程終了できたことは幸運だった。個人的な感想を書かせていただければ、清末浩平氏の唐十郎研究の発表が印象に残った。非常に時間をかけた研究成果を丁寧にまとめていただき、今後唐十郎を上演する若い演出家たちにとっては財産と言えるギフトだったのではないかと思います。

【報告】黒澤世莉

「日本の近代戯曲研修セミナー」として過去17回開催された企画を「日本の戯曲研修セミナー」と名前を改称して開催する東京での第1回目。「別役実&唐十郎を読む！」ということで2人の作家を取り上げた。「日本の近代(略)」では「日本近代戯曲の起源」は何か、また各作品における「なにを達成し、なにに挫折したのか」などが主題であった。「日本の戯曲(略)」でも過去17回の研修成果を引き継ぎ、近代から現代へと継承されたもの、あるいは切り捨てられたもの、という視座を持ちつつ、60年代演劇に特筆される「時代の熱」についても知見を深めた。

参加者人数も過去平均に比べ4倍となり、唐と別役に対する注目度の高さがうかがえた。

プログラムは全10回、前回は引き続き、前半5回はレクチャー、ゲストトーク、戯曲の音読、その後のフィードバックで構成され、後半5回はリーディング発表のためのリハーサル中心の3回と、リーディングとシンポジウムの2回という構成にした。

「時代の熱」については、2回のゲストトークに小林勝也氏、渡辺えり氏、大久保鷹氏、高取英氏を迎え、縦横無尽に語っていただき、まだ当時生まれてもいない参加者にも感じられる熱を手渡していただいた。

リーディングについては、主催事業の若手演出家コンクールにて成果を上げた新進気鋭の演出家、森田あや氏と笠浦静花氏に担当していただき、独自の視点から唐、別役の言葉に真正面から立ち向かう勇敢さが、新鮮な空気を運んだ。

若手演出家コンクール2018 中間報告 第一次審査通過者決定!!

若手演出家コンクール2018 実行委員長 大西一郎

「若手演出家コンクール2018」の第一次審査会(ビデオ・DVD審査)が、2018年8月29日午前11時より日本演出者協会事務所(新宿・芸能花伝舎)にて行われた。

採点方法は各審査員が応募者それぞれについて10点満点で採点し、その合計数を審査した審査員の数で割り獲得点数を出すという方式である。各応募者の作品に付き5名以上の審査員が審査した。

最終審査当日は、右記採点を踏まえながら審査は応募者72名全員に対し1名ずつ各作品について審査員がコメントをしていく形で進化した。欠席した審査員は個別に全作品に付き詳細に採点評価を書面で提出し、その文面も確認しながら審査を行なった。

獲得点数上位の者から異論なく決定していったが、最後は小数点以下ほぼ同列6名から2名を残すというハードな展開となった。議論も長く白熱し例年より遙かに予定時間をオーバーする展開になったが、結果、第一次審査通過者15名(次点2名)が決定した。議事進行は実行委員長の大西一郎およびコンクール部長の西沢栄治が行なった。

【若手演出家コンクール

第一次審査通過者】(敬称略)

秋葉舞滝子(東京都)

石田聖也(福岡県)

一宮周平(東京都)

うえもとしほ(東京都)

大河原準介(宮城県)

國吉映貴(埼玉県)

杉本奈月(大阪府)

寺戸隆之(神奈川県)

豊島勇士(京都府)

日本人(若手県)

梶形浩人(愛媛県)

八代将弥 aka SABO (愛知県)

山口将太郎(東京都)

吉田康一(東京都)

渡辺 岳(兵庫県)

【次点】

1、小佐部明広(北海道)

2、太田 勝(東京都)

※若手演出家コンクール第一次審査員は左記の通り。(敬称略)

貝山武久、加藤ちか、鹿目由紀、木村繁、小林七緒、佐野バビ市、スズキ拓朗、高橋純、土橋淳志、弦巻啓太、外波山文明、はせひろいち、日澤雄介、平塚直隆、広田淳一、山田恵理香、流山児祥、和田喜夫

今後、11月30日までの期間において、審査員が候補者の公演もしくは公演に準ずる通し稽古を実際に観ての第二次審査が行なわれ、最終審査進出4名(優秀賞)が決定する。

最終審査は、2019年2月26日(火)3月3日(日)の期間、下北沢「劇」小劇場にてその4名による作品上演を経て、公開審査で最優秀賞が決定する。

演出者と法律

第四回

「その約束、有効ですか？」

法務部長 藤間 健

芸術の秋、本番です。皆さま、作品作りに、本番にと、ご多忙のことと思います。さて、いきなりですが、まず前回の振り返りクイズです！「ダクセイケイヤク」ってなんでしたっけ？（正解は末尾）前号触れた言葉ですが、現場でご活用いただいているとしたら、とても嬉しく思います。

今号では、その締結した契約が「無効」になったり、「取り消し」が出来る、出来ない、夫々の場合があることを、検証していきたいと思います。

そもそも、芝居を創る際には数多くの人々との意志の疎通を繰り返して、繰り返して、信頼を得て、一步一步進めていく訳ですが、現場では「気が変わった」人や「良く分からない」まま参加している人がいたり、「○○さんがいるから嫌だ」と言い出す人が、年齢や経験を問わずにいることも事実です。しかし、今共に考えている話題は、右記のように、自分の気持ちだけでは、契約は成立も、取りやめも出来ません。

私たちには、契約をするか、しないかの

自由があります。ですが、一度イエスと言ったら、その言葉に自分が責任を持つことが要求されているのです。

契約が無効になる時

私たちは、ささいな日常生活の中であっても、「この件は無かったことに……」と言うことがあります。この「無かったこと」になってしまうのが、どちらか一方、または両者が、**制限行為能力者**(※)である場合。我々に該当すると思われるのは、このうち第4条の未成年者かと思えます。

続いて、**錯誤と通謀虚偽(ツウボウキョギ)**。これは自らが話さなければならぬことについて、理解が不十分であったり、筋道が通らなかつたりするために、言葉の運び方が適切でなく、相手を十分納得させられないことを意味するので、演劇人としては恥ずべきことになります。その他に、**公序良俗に反する場合、実現不可能な事柄**は最初から契約は締結できなかったとして成立しないのです。これを「無効」と言います。

逆に言えば、これらの不幸な条件を取り除けば、契約が成立することになります。ただし、これは遡って有効になる訳ではなく新たな契約がここから始まるということなので、慎重に利用して下さい。

我々の持っている専門性は、舞台の上だけでなくこういうところでも十二分に発揮されて良いのだと思います。コミュニケーションが欠如しているといわれて久しい中、商業演劇に参入するか否かという意味ではなくて、一般の方々にとっても芝居を学ぶ価値はここにあるはずです。

取り消しが成立する時

さて、もう一つの「取り消し」についても少々。先に触れた「無効」との違いは、目の前の契約が正しく形をなしているところ。すなわち「無効」との違いは、契約は有効に成立しているという点です。

いつもながら先輩諸氏には失礼と思いつつ、備忘録を兼ねて、具体的に例をあげてみます。

・契約の当事者は、誰と誰に対するものなのか。

・いつ、どこで、公演名は。

・依頼内容は。

・契約期限と対象者は。

・著作権や、所有権の確認。

・記録媒体やその後の使用はあるか。

・再演等の転用は可能か。

・事故等への対応は。

・キャンセル対応は。

・予算が発生する項目は。

・支払いのタイミングと方法。

・税金の扱いは。

・トラブルが起きた時の対応。

・委託の場合の線引き。

などなど。

他にも確認すべきことはあるはずですが、これらの一つにでも不安材料が見つかった時、このまま続けるべきか、立ち止まるべきかを考えなくてはならなくなりま

す。本当に反故にすると決めた際には、何がダメなのか、その思うところの全容を相互に確認し合い納得しなければなりません。さきと同じく、**制限行為能力者**(※)が単独で契約した場合は当然無効ですし、当然

のことながら詐欺や強迫によつてすすめられたものは取り消しの対象と考えて良いはず

です。ここで、時間経過を確認しておかないと取り消すことが出来なくなってしまう、ということを知っておいて下さい。民法**126条**には**取消権**があり、不安材料が見つかった時から起算して5年間これを行行使しない時に時効が発生します。更に、行為から20年を経過した時も同様とされています。

契約行為は自分の味方

作品作りに5年という期間が長いかわりに。またその作品が世の中に出され、多くの人の知るところになって再演、再々演されることや、記録媒体に乗って拡がっていく時間が20年を数える可能性。このように考えを巡らせてみると創り出す側の我々には、契約という行為は面倒なものではなくて、自分の進む道に寄り添って自分を守ってくれる一つのパートナーであることが意識出来るかと思えます。

さて、冒頭のクイズの答えはいかがでしょう？

正解は、諾成契約。「口約束」の意味です。法務部としては、会員諸氏が、楽しく法律と付き合つて、よりよい作品作りを目指して下さいを願っています。

※ 順に、民法第4条未成年者、第7条成年被後見人、第11条被保佐人、第15条第1項被補助人の総称。

演劇の稽古場における

《ダメ出し》と《パワハラ》の境界線は？

演劇の稽古場において「演出家の言うことは絶対」と教えられてきた先輩世代にとっては若い世代への愛情を持った《ダメ出し》のつもりが、何故か《演出家のパワハラ》と捉えられてしまう……。

そんな事例がメディアで話題に上るたびに、「演出家＝パワハラ」の構図が必要以上に強調されている傾向が見られます。

実際に創作現場にいる皆様は、《ダメ出し》と《パワハラ》の境界線について、どのように考えながら日々の創作活動が続けているのでしょうか。皆様の率直な考えを聞かせてください。

北海道 八十嶋悠介

(紹介者／畠山由貴)

まず自身は、劇の演出をする際にパワハラ的な振る舞いになってしまう事を過剰に恐れているタイプだと思います。『肯定から入る』とか、『面白いところを見つけて積極的に面白いと言う』とか、『笑う』とか、『虐待する』とか。嫌われたらどうしよう、という精神です。それはそれで問題かもしれませんが。

劇を作る現場において、演出家は意識するしないにかかわらず空気を左右する存在なので、パワハラ的なものと結びつきやすいというのはあると思います。でもたぶん、パワハラをしている側にはパワハラという意識はありませんし、その逆もそうです。捉え方には溝があります。

私見だと、パワハラ的な振る舞いをしていて、と周りから認識されている演出家本人の認識は、大まかに分けてこのどれかだと思います。

- ① 劇を良くする事を考えて厳しく当たってしまった結果パワハラと捉えられた
- ② 作劇がうまく進まないことへの八つ当たり

東北〈秋田〉 坂本好逸

(紹介者／土谷久男)

③単純にその人のことが気に食わない
②と③に関しては100%演出家が悪いのですが、①がたぶん悩ましい問題なんですよ。『演技やスタッフワークに対しての意見や指導』だったつもりが、言い方や態度によって「その人自身を傷つけるような行為」に簡単に変わってしまう。私自身も、そういう経験が無かったかと言えは自信がありません。だから、パワハラとダメ出しの境界線はぼんやりしたものではなくて、その境界線をいかにちゃんと見ようとするか、ということではないのだと思います。

「ダメ出し」で立ち上がれないほど罵倒されながら舞台にしがみ付いてきた。「ダメ出し」で何も言われないうちは「あれ……ついに降られるのか？」と、居ても立ってもいられない。

「お前さんは、その程度だ」と言われた仲間がいた。先輩にきいてみた。「それは褒められているんだよ、良かったな」と仲間の背中をたたいていた。「あの先生(演出家)は、『良

かったよ』なんて言った事が無いんだから……最高の誉め言葉が、『お前さんはその程度だ(これ以上、良くなるのを期待してる)』。だが、私は「その程度だ」と言っていたいた事はない。黙って何回もコガエシをさせられて、終いには「何度やったら解るんだ」と罵声が飛んでくる。

現代では「パワハラ」と受け止められるのだから「いい舞台を、お客様に……」と、やがては「お前さんは、その程度だ」と言っで頂きたいと、稽古場の帰りは居酒屋で安酒をなめていたものです。「罵声」は「激励」、「安堵」は「新鮮さを失うこと」と知ったのは、この頃のことである。今も聞こえてくる「お前さんはよー」先生には感謝の気持ちを伝えたいが、黄泉の世界におられる。信頼する演出家の「ダメ出し」は期待と激励であり、信頼関係が無くなった時には同じ「ダメ出し」でも「パワハラ」と受け止められるのだろう。役者には「客観性」がない。自分自身を分かっているようで見えていないことが多い。演出家の意図する表現をしているつもりでも、そうは見えないことがある。

中部・甲信越〈新潟〉 市井優

(紹介者／石附弘子)

どうも。新潟で演劇活動をしている市井です。日本演出者協会に入会しましたがもっぱら役者で活動しています。

さて、日頃パワハラについてなんてちっとも考えていませんでした。お話をいただいた頭を捻ってみました。「ダメ出し」と「パワハラ」の間の境界線というものが自分には想像できません。それ程までにこの2つは「別物」であると考えます。つまり、パワハラと受け取られかねないダメ出しはパワハラなのだと……。

「ダメ出し」か「パワハラ」かは内面が決める、そこに愛情があれば、役者との信頼関係はあればいい、という問題ではありません。教育の現場、スポーツの現場などを見れば、暴力＝身体的なものに限らずを以て行

われる指導は、真つ当な領域においては完全に否定されているはず。

パワハラと境界を接するようなダメ出しといえば、声を荒げたり、何らかの精神的圧迫を伴うものなのでしょう。そのような行為は、詳しいわけではありませんが、教育的効果としてはマイナスに過ぎないと結論が出ているはず。芸術の領域ではその限りではないという考えが残っているとすれば、それは驕り以外の何物でもないと考えます。

揚げ足取りのような指摘で申し訳ないのですが、今回の問題について、ちよつと違和感を持ったのです。執筆依頼文には「先輩世代から若い世代への愛情を持ったダメ出しのつもりがパワハラと捉えられ」という文言がありました。この問題を世代間ギャップが原因と考える意識が主流なのであれば、これはある種のシグナルではないかと考えます。

ともあれ、一旦視野を広く持ち、他の業界の取り組みなどに学ぶことも必要かと思えます。

関東〈東京〉 菅田華絵

(紹介者／眞鍋卓嗣)

《ダメ出し》と《パワハラ》の違いは、そこに愛があるかないかと、耳にしたことがあります。愛のない《ダメ出し》は指示ではなく、命令のように聞こえることがあり、《パワハラ》になり兼ねないからです。しかし、いくら愛を持って話しても、受け取る側が自分の尊厳や人格を傷つけられたと感じてしまったら、それはハラスメントとなってしまう訳です……。つまり、《ダメ出し》とは、《パワハラ》とはこういう事をこういいう言い方で言うことであるという定義は出来ないのではないのでしょうか。要は相手との信頼関係を築けているか否かが重要であって、同じことを同じ言い方で伝えても、相手の受け取り方次第で《パワハラ》と受け取られる可能性があると思います。それは受け取る側の問題だと突き放すことは簡単です。しかし、信頼関係を築けていない稽古場において、いい

作品が生まれるでしょうか。いい作品を創るために、稽古場においては信頼関係を築き上げることが重要だと思います。信頼関係を築くには、演出家という立場から抑圧すべきではないと思います。抑圧からは自由な発想は生まれませんし、いいものを創り上げる稽古場にはならないからです。演出家というポジションで、権力者のように振る舞う人もいます。しかし、権力から信頼が決して生まれません。人と人との信頼があつてこそ、いい作品づくりを目指すはずで、私は互いに信頼し、尊重しあえる稽古場づくりこそ、演出家の重要な仕事のひとつだと思っています。そういった稽古場づくりによって、『ダメ出し』を『パワハラ』と受け取られる可能性も減るのではないのでしょうか。

東海〈愛知〉 西尾武

(紹介者／みなみ津姉)

ハラスメントにおける「境界線」は、ひとりひとり、タイミングや状況、関係性によって変わるものだというのを、前提に考えていないといけないと思っています。特に、稽古場における信頼関係は、高校生の頃から大切にしています。あくまで個人的な考えに過ぎませんが、自分は演出家であっても、先輩であっても、ひとりの人間として、あくまで対等であるべきだと思いながら稽古場にいます。相手に対する言葉の配慮であつたり、的確な伝え方の意識であつたり、相手への思いやりであつたり。それが欠けていくにつれて、その分関係性や信頼にもヒビが入っていくと思ひながら演出をしています。その意識さえ忘れなければ、その「境界線」からはみ出ることもないはずで、

「境界線」という話からはずれてしましますが、具体的にパワハラについて考えてみると、パワハラを生む大きな要素は「怒り」だと自分は考えています。稽古場において、あえて「怒り」を露わにしなければいけない場面もあると思います。しかし、自分の思い通りにいかない時に生まれる怒りの感情は、

自分は悪だと思っています。なので、思い通りにいかない時に怒らず冷静に考えられる余裕が、自分には必要だと思います。当事者や周りの人間に、パワハラだと思われたら、そこで信頼関係も崩れてしまいます。

最初に述べたように「境界線」は常ならずと自分は思っていますので、パワハラだと思われないためには、「境界線」を意識することよりも、相手を尊重できる心の広さと思ひやりの意識が必要だということに、自分は至りました。

関西〈兵庫〉 岩崎正裕

(紹介者／瀬口昌生)

その昔、大学で演技を学んでいる頃に、担当教員から罵倒を繰り返されました。「このチンピラ!」「イ○ポ!」等々。あぐくに九尺高の台上から飛び降りるよう命じられたり。けれど、私はこの言動に意趣返しをしようというのではありません。田舎出身の私はその頃、自分を大層価値がある人間だと感じていました。この叱責で傲慢な自意識のようなものはすっかり剥ぎ取られたのです。数々の罵声は平等にみんなに向けられていましたし、何しろこの先生、軍隊帰りだという噂でしたから、このような方法以外考えつかなかったのでしょう。これは時代のせいなのかですが、スポーツ界を震撼させるパワハラ問題も根本は同じです。指導する側と受け取る側の価値観の齟齬。冒頭の暴言、「このチンピラ!」は今なら、「姿勢が悪いよ」「イ○ポ!」は「下半身に力がない」と改められるべきなのでしょう。でも何だかモヤモヤします。過剰な暴言は必要ありませんが、馴れ合いにならない、人を導く強い言葉を演出家は求めているのですから。いずれにせよ相互の信頼関係あつてのダメ出しです。

演劇におけるパワハラ問題について、年長者の演出家から年若い俳優に対してという図式で語られがちですが、年配の俳優が若い演出家の方針を否定的に捉え、孤立させるという事例だってあるでしょう。パワハラとは職

場を正常に機能させるために生まれた概念であるなら、私たちの演劇現場は職場であるのかそうでないのか。それを考え続けることが重要だと痛感しています。必要なのはフラットに對話が生まれる場所ではないかと。

中国・四国〈山口〉 石田千晶

(紹介者／篠崎光正)

私は、演出と言っても、顧問をしている高校の演劇部での創作活動が中心です。ガラスの十代を相手の演出は、覚悟を持った大人の役者の演出の何倍もパワハラに気をつけねばなりません。

役者たちは追い詰められたとき、驚くべき飛躍を遂げることがあります。感性豊かな十代の子たちが演劇を通して見せる成長は著しく、教育者としてそれを目撃する喜びにハマってしまった私は、役者が頑張れるギリギリのところまで追い詰めて、その成長を期待するといふ危ない橋を渡っています。追いつめると言っても乱暴な言動を使う訳ではありません。矢継ぎ早の質問や厳しい要求をするだけです。

しかし、境界線は個人の精神状態によって変化し、見極めを誤ると、親御さんから苦情が来たり、突然の退部になったり……発した言葉は、文脈ではなく、断片をとらえられて非難されます。だから、言葉にはかなり神経を使っています。

部活動だから皆で演劇を創る愉しさを味わわせることが一番だとおっしゃる方もいますが、私は、自己満足の創作で終わらず、観客に喜んでいただく努力までが学ばべきものだと考えます。作品に本気で向き合うために、観客の時間を頂く覚悟を持つために、稽古場の緊張感を演出することが私の役目です。同時に、アイデアを自由に出し合える雰囲気創りも不可欠です。誰かが提案したことは否定せずにやってみる!というのは、演劇大学inくだまつで指導いただいた小林七緒さんの教えです。観客に最高の作品を提供する使命感を共に持ち、演出の難しさも

メ出しを受ける側の辛さも理解していれば、ちよつとしたボタンの掛け違いから起きるトラブルを防ぐことが出来ると考えています。

九州〈大分〉 ルーシー・ラヴグッド

(紹介者／石田聖也)

パワハラをやめましょう、の一言でなぜ解決しないのだろうか。パワハラをしてやろうと意気込む人も(たくさんは)いないだろうし、被害者側の人間も、自分がそういった目に合うとは思っていないだろう。パワハラは境界線は定義することができない。特に当事者の間では。

自由になるためには、自身の思考的な殻を俯瞰する必要がある。一度殻の外に出なくてはならない。強いストレスをかけ、既存の概念を壊して再構築する方法が有効だ。しかしそれは十分パワハラになり得る。

簡単な方法に頼らず、思考停止せずに新しい方法を探し続けたいといけない。人に堂々と自分のやり方を見せられるだろうか。それを見ている人間が、忌憚なく意見できる環境だろうか。そこに気を配っていないとはいけない。

だが十分に注意して創作をしていると境界線はわからなくなる。人間関係の狭い集団だけで過ごしていると、誰かが傷ついていても気が付かず、ハラスメントの温床となる。被害者本人も気が付かない。環境がハラスメントでないとは判断してしまうと、個人の認識はばやけて自身のストレスに鈍くなる。

普段冷静な人間でも、疲れたり熱中したりで一線を踏み越えるかもしれない。それが徐々に常習化していくかもしれない。演出家は外部の集団と意見交換をし、道徳の境界を随時更新していく必要がある。演出家と直接関係する以外の人間の、客観的な目がパワハラとの境界線を見定めるひとつの指標になると考える。

すべてを開示した稽古場をつくれるだろうか。閉じた稽古場でも客観的な目を入れて、その境界線を見定めていきたい。

各地域活動通信・民間小劇場特集

「地方の民間小劇場」

昨年発行の協会誌『D』第19号にて特集し、反響の大きかった「地方の民間小劇場」。

その後も地方における“小劇場不足”は変わらず、多くの劇団が広さや費用など様々な面で、身の丈に合った公演場所を確保できずに苦勞しています。

今号では民間小劇場特集の第2弾として、地域芸術の発展を視野に入れながら、情熱を持って運営されている民間小劇場をピックアップ。「地域と劇場との関わり方」や「劇場運営の工夫」、「劇場独自の取り組み」など、運営に対する考え方や想いを伺いました。

新潟県

新潟古町 えんとつシアター

舞台芸術監督兼支配人 逸見友哉

新潟市の繁華街「古町」の一角にある新潟古町 えんとつシアターは、2014年に閉鎖したシアター「えんとつ」を引継ぎ、2015年4月にオープンした小劇場です。お察しの方もいるかもしれませんが、えんとつシアターの名前の由来は「えんとつ」ではなく「えんとつ」です。

えんとつシアターの特徴的な取組みの一つとして、オープンから毎年開催している「演劇×お化け屋敷 恐怖のえんとつ村」をご紹介します。いわゆる順路に沿って進むウォークスルー型のお化け屋敷で、当初は劇場の宣伝目的で始めたのですが、年を追うごとに反響と動員が増え、今年は1700人を超える方々に足を運んでいただきました。

お化け屋敷をやるうと思っただけですが、うちのスタッフがお化け屋敷をやりたいと言いだしたのが発端で、よくよく話し合ってみると、お化け屋敷の設備と劇場の設備がほぼ一緒ではないか？という結論に辿り着きました。照明、音響は普段劇場で使っていない設備を流用できるし、効果音や衣装や仕掛け人は、周りに喜んでやってくれる劇団関係者がたくさんいます。こんなに相性の良い、地域住民に喜んでもらえるイベントはありません。集客に関しては、近年のSNS等の普及に伴い、動員2000名を超えたあたりから、こちらが何もしなくても勝手に広がっていく現象がみられました（ただし、最初の2000名を迎える努力は惜しんではいけません。ここが一番大変なところだと思います）。メディア関係者にも事前にプレスリリース等で案内はしているのですが、世間で話題になるまでは大して反応がなかったのに、動員に火がついてからは何件も取材が入り、さらにそれが拍車をかけて、効果的な集客に繋がりました。

来年以降は、劇場から離れ、他の団体・イベントとタイアップしての開催を検討しています。皆様の地区でも夏の風物詩「お化け屋敷」開催してみませんか？相談に応じますよ。



神奈川県

若葉町ウオーフ

一般社団法人横浜若葉町計画 代表理事 佐藤信

2017年6月、横浜の下町若葉町に、小さな民間アートセンター「若葉町ウオーフ」を開設しました。100平米ほどの多目的スペース、同じ広さのリハーサルスタジオ、二十床のドミトリ形式の宿（WHARF INN）を併せもつ複合施設です。Wharf（波止場、埠頭）と名付けたこの場所を「小劇場」ではなく、敢えて「アートセンター」と呼ぶのは、ここを単なる上演や発表の場所ではなく、ひろい意味でのものづくりの場所、そのための出会いの場所にしたいと考えたからです。

開館一年後の今年、「全国小劇場ネットワーク会議」がウオーフで開かれました（8月28日、29日）。昨年の沖繩にひきつづいて第二回目の開催でしたが、全国の民間小劇場運営者を中心に、70人をこえる参加者がウオーフに集まり、各劇場、施設の活動報告、「劇場運営の資金的基盤」「若手が育つ、各劇場の取組み」ほか、あわせて六つのテーマをめぐるグループディスカッションなど、熱心な情報交換と交流がおこなわれました。



△全国小劇場ネットワーク会議の様子

正式プログラム後の懇談会を含めて、全日程に参加して、これまであまりふれることのなかった各地の小劇場の多彩な取り組みを知り、東京と一部関西圏に偏った状況認識を反省し、同時に力づけられました。グループミーティングのテーマのひとつだった「劇場とゲストハウスの併設」が端的に物語っているように、アートセンター若葉町ウオーフは、決して特異な存在ではありませんでした。視野をひろげて眺めてみると、列島各地ではすでに数年前から同じような取り組みがはじめられており、ウオーフもまた、確実にその仲間のひとつだったのです。

豪華客船が停泊する大きな港の波止場ではなく、川べりで小舟を待つ若葉町ウオーフが、使いやすく、しかも癖（個性）のある船着場として皆さんに利用されることを、ここから期待しています。

三重県 津あけぼの座・四天王寺スクエア

特定非営利活動法人パフォーミングアーツネットワークみえ
代表理事／津あけぼの座・四天王寺スクエア
プログラムディレクター 油田 晃



津市は三重県の県庁所在地で、2006年に周辺の10市町村と合併、近鉄名古屋線とJR紀勢本線が乗り入れる人口27万人の地方都市です。

津あけぼの座は、三重大学の演劇研究会から派生した社会人劇団の稽古場だった元学習塾を改装、客席数50席の小規模空間として2006年10月オープンしました。

その後、2011年にNPO化して、翌年150席の四天王寺スクエアをオープン、地方都市においても、良質な優れた演劇が存在することは体験的に知っていましたので、大都市と地方都市の差は人口と演劇する人を分母分子ととらえるとその割合はあまり変わらないのではないか？そこに暮らすコストや空間的なコストを考えると劇場運営は地方の方が可能性はあるのではないかと？という仮説のもと、志ある他の地域の劇場や地方公演を模索するカンパニーと提携、コンテンツを交換し公演や交流を続けております。

時を同じくして、指定管理者制度の中で特色ある公共劇場づくりを模索していた三重県文化会館と共同して、プログラムスケジュールの共有や、初めて劇場に足を運ぶお客さまの創出、定期的に劇場に足を運ぶお客さまの確保、三重県内の飲食店を舞台に全国のカンパニーがリーディング公演を行う「MPAD」の共同主催など、試行錯誤を重ねています。

都市部に比べて「演劇」と出会うことがなかなかないだけに、公演でお招きする団体は、ただ繋がりを持ってお呼びしたというのではなく、観て頂いた方に何か「気付き」を持ってもらえる作品であることを心掛けてお招きしています。

現在は、三重から全国に発信しようと、作品の製作も始めました。優れたコンテンツを産み出し発信する。地方都市からの挑戦はまだまだ道半ばです。



△津あけぼの座プロデュース
あうんの会『海につくまで』

大阪府 IKSALON表現者工房

代表 池田直隆

いつも目標をたてるときに、壁や垣根などの障害物があります。一つが都市間の垣根。物理的に遠く、宿泊や稽古場の手配が必要になります。二つ目が、言語の壁です。主に日韓の交流を目指してきたのですが、だいたいの公演はそのままの作品を持ってきていただけで、俳優とスタッフは一緒に作品を作る機会がありませんでした。三つ目は観客（市民）と舞台上の俳優の壁です。インタラクティブであることだけではなく、演劇を見たこともないような一般市民とどう交流するか？ということでした。

それら三つのことを一度に解決できる方法は、公演・稽古・滞在の場所が同じであればよいのではと考えたのが「表現者工房」です。

そのために、「表現者工房」は自主企画もします。

一つの柱は韓国との交流。二つ目は市民参加演劇とリーディング。三つ目がほかの団体との協力公演です。韓国との交流は主に二つ。ソウル・東京・大阪の演出家が集まって演劇の現在について語るシンポジウムです。その中で、ソウルの演出家の作品を、本人の演出で日本のキャストで紹介するのも2作品になりました。また、日本のオリジナル作品を、韓国の俳優と日本の俳優がそれぞれ母国語で演じる公演も6作品を数えます。



△目録韓国語演劇『あけぼの座と紳士』2018年3月
IKSALON表現者工房ノールでの公演

市民参加もリーディング公演と、演劇公演の二つのカテゴリーになってきています。2年前の設立時は、東京から演出家を呼んで、チエーホフやシェイクスピアらのクラシックが、現在、東京などで上演されている戯曲をリーディングする公演を、シニアの方、主婦、学生らが集まって上演してきました。今年も4作品上演してきましたが、3年目にして、参加市民から演劇公演もやりたいと言う声もあがってきて、遂に市民参加演劇の公演をやることになりました。

韓国とのことも、市民参加演劇のことも一つ一つの垣根を越えてきたことが、少しずつ結果している感があります。さらなる都市間、言語間、市民と演劇人間の交流を進めて行きたいと考えています。

京都府 アートコミュニケーションスペースKAIKA

劇団衛星プロデューサー 植村純子

KAIKAができて、8年が経ちました。ご縁あって、空きスペースを劇団の稽古場として使わせてもらったところから始まり、現在、劇団衛星が「フランチャイズカンパニー」として、劇団代表の運行が「芸術監督」として、活動しています。

KAIKAは、いわゆる「劇場」と呼べるような設備は整っていません。ゆえに、劇場として貸し出して使ってもらう、といった運営はできません。そんな場所だからこそできることをやりたい、と考えています。

KAIKAは、作品を「つくる場」です。

また、他地域から京都へやって来る入り口になったり、若い人たちがこれから劇場での公演をやっていくためのきっかけや、ここで繋がった縁から京都以外の地域に出ていくきっかけにもなる場所でありたい、と思います。

私たちは、他に本業や副業を持たずに演劇をする「プロの演劇人／小劇場劇団」も、世の中にはあったほうが良い、と考えて活動しています。よって、プロの劇団やプロを目指す人たちの支援に重きを置いてきました。

現在、「アソシエイトカンパニー」であるソノノチ、劇団しようよを中心とした、より若い劇団や演劇人とともに活動しています。彼らはKAIKAを拠点に作品を創り、京都やその他の地域での公演を行なっています。この2つの劇団は、ここ数年、KAIKAで創った作品を京都の別の会場で上演したり、今年は共にツアー公演に臨んでいます。これは、偶然ではないだろう、と私は感じています。KAIKAがより良い作品の創作と、彼らの継続した活動をサポートできているのは、こんなに嬉しいことはありません。その他、KAIKAで地域の子どもや大人と演劇を楽しむワークショップをしたり、京都の演劇人たちと一緒に、大学等とも連携して、小中学校や福祉施設等へ赴いたりもしています。また、KAIKAは祇園祭の「岩戸山」の鉦町にあり、お祭りの時期は近所の方々と一緒に、岩戸山をお守りする仕事をお手伝いしています。これからも、作品を創り発表していく拠点、演劇を社会につなぐ拠点として、志を同じくした人たちと共に、この場所を活用していければ……と考えています。



△外観と祇園祭の様子

平成三十年度
一般社団法人日本演出者協会

定例総会

年に一度の定例総会が8月5日に芸能花伝舎にて開催されました。

定款の定めに従って、流山児祥理事長が総会議長を務め、和田喜夫事務局長と共に進行しました。

まずは2017年度の活動報告として、「平成29年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」である「演劇大学」「国際演劇交流セミナー」「日本の近代戯曲研修セミナー」「若手演出家コンクール」の各事業部から、それぞれ成果報告がありました。また「出版事業」「協会誌『D』発行」「フェニックスプロジェクト」「日韓演劇交流センター」「観劇案内」の報告も行われました。



2017年度の会計報告では、一般会計、特別会計、助成金の報告があり、2018年度の活動計画、事業計画、予算案とともに承認されました。中でも西川信廣部長による「演劇センター構想」の活動計画は、その場にいた協会員からの反応も大きく、活発な議論が行われました。

関西ブロック、東海ブロック、九州ブロックからも詳細な活動報告が行われ、東北ブロック立ち上げの構想も話題に上り、大いに盛り上がりしました。

【報告】秋葉由美子

部会だより

広報部 秋葉由美子

8月の定例総会では全国の協会員から『D』に関するご意見・ご感想を直接聞く機会に恵まれ、自分たちが作ったものが全国に届いている実感を感じることができました。広報部員も増えてきて、部会や取材活動を通じて部員同士の結束力も高まってきています。やはり、直接顔を合わせて対話することが演劇の基本であり、こうしたコミュニケーションの基本でもあるので、部会や理事会などの「対話の時間」を大切に、皆さんのご意見を取り入れながら、新たなアイデアを生み出していかれたらと考えています。

教育出版部 山崎哲史

教育出版部は、会合が延期の状態です。毎月一度、全4回に渡って有志により準備会を開催し、総論各論、出版様式に至るまで、さまざまな立場からの意見を卓上に広げました。議論はまだ散らかったままとなっていますが、演劇の「啓蒙」と「普及」という観点から、演劇界が共有すべき知識や訓練法などについて、協会が主導して一定の「スタンダード」を示すことは有意義であり、そのためにも「教科書的な出版物」の必要性について再認識しました。現在は、再開の準備中です。

演劇センター推進部 西川信廣

先日、演劇センター創設に向けて会員の皆さんにアンケートを実施しました。アーカイブなどの情報センターとしての役割、養成・研修の場、稽古場やカフェなどを併設して人々が集える場、など様々な意見をいただきました。また、それらの機能が、首都圏に偏らず、地域にも広がるための仕組みなどを考えるべきなど沢山のご意見をいただきました。課題は沢山ありますが、多くのご意見をセンター創設にどのように取り入れていくかを検討し、会員の多くが満足するセンター像を考えていきたいと思っています。

フェニックスプロジェクト 大西一郎

未曾有の大災害をもたらしたあの日から7年以上の時間が流れほとんど多くの事が未だ全く解決されていないというのに、私達はどこかでこの日常の時間の流れに慣れてしまっている所もあります。あの時被災した子供も既に高校生や大学生の世代になっています。前回はその高校生達の現在と対話することが出来ました。そしてまだ何も終わらず何時また新たに起こり得るかもしれない現在そして未来の問題として舞台芸術家は何が出来るのか、具体的な行動としてフェニックスプロジェクトは考え続けて行きたいと思っています。

日韓演劇交流部 シライケイタ

来年1月開催の日韓現代戯曲ドラマリーディングの準備が本格化してきました。

文化庁の助成金が増えつつあるため、これまでの規模での開催は不可能と一時期は諦めかけましたが、都民芸術フェスティバルに採択され助成金をいただけることになり、ホッとしております。ただ今、文化庁の二次募集にも申請中です。

そして三作品の演出家が決まりました。『刺客列伝』が川口典成さん。『少年Bの住む家』が大澤遊さん。『黄色い封筒』が中野志朗さんです。10月末に、出演者オーディションが開催されました。

法務部 藤間健

近年、我々、演出者のまわりには多くの法律問題が存在しています。著作権などの問題である知的財産法に関する事柄だけではなく、契約関係などの民法分野など多岐に渡ります。法務部では、今後も引き続き、演出者を取り巻く法律問題を調査・研究し、協会誌『D』の中で皆様にお伝えしていきたいと思っています。また創作にあたり、気になることが生じた際には、いつでも法務部までご相談下さい。

※演劇大学部、国際部、日本の戯曲研修部の活動に関しては、それぞれの事業報告記事をご覧ください。

理事会報告

◆2018年4月6日(金) 12時~14時

◆常務理事会

場所：協会事務所

出席者：11名(委任3名)

常務理事(大西一郎、小林七緒、坂手洋二、シライケイタ、西沢栄治、日澤雄介、松本祐子、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫)、国際部部長(佐川大輔)、日本の戯曲研修部部長(川口典成)、広報部部長(秋葉由美子)

- ① 文化庁ヒアリングについて
- ② 新年度の事業について
- ③ 演劇団体との共同事業
- ④ 教育出版部勉強会、演劇教科書について
- ⑤ 《その他》芸団協役員候補者について、東京都迷惑防止条例について

◆2018年5月14日(月) 11時~13時

◆全体理事会

場所：芸能花伝舎A2

出席者：21名(委任4名)

大西一郎、菊川徳之助、坂手洋二、佐藤茂紀、シライケイタ、扇田拓也、田中孝弥(Skype参加)、成井豊、西沢栄治、ふじたあさや、宮田慶子、山田恵理香、流山児祥、和田喜夫、監事(外波山文明)、評議員(瓜生正美)、国際部部長(佐川大輔)、日本の戯曲研修部(川口典成、大河原準介、齋藤敏明、山下キスコ)

- ① 協会の今後の方針について
- ② 演劇大学(inやまがた、函館、しまね)
- ③ 全国の劇場について
- ④ 若手演出家コンクール2018
- ⑤ 日本の近代戯曲研修セミナー(in東京、福岡、東海)
- ⑥ アジア青空劇場フェスティバル
- ⑦ 協会誌『D』20号表紙デザイン検討
- ⑧ フェニックスプロジェクト

《その他》国際演劇交流セミナー、新事業企画部、日韓演劇交流部、教育出版部勉強会、演劇教科書について、大阪文化芸術フェス、文化庁ヒアリングについて、仙台の演劇状況、アジア世界大会、東京都迷惑防止条例について

◆2018年6月15日(金) 10時~12時

◆常務理事会

場所：協会事務所

出席者：6名(委任5名)

常務理事(シライケイタ、西沢栄治、和田喜夫、監事(外波山文明)、日本の戯曲研修部部長(川口典成)、広報部部長(秋葉由美子)

- ① 演劇大学(inやまがた、しまね)
- ② 国際演劇交流セミナー(台湾、韓国)
- ③ 日本の戯曲研修セミナー
- ④ 若手演出家コンクール2018
- ⑤ フェニックスプロジェクト
- ⑥ 協会誌『D』20号アンケート「協会に望むこと」について
- ⑦ 《その他》会費未納会員について、関西ブロック総会、北上ワークショップ、自主事業について

◆2018年7月18日(水) 11時~13時

◆常務理事会

場所：協会事務所

出席者：11名(委任1名)

常務理事(大西一郎、小林七緒、西沢栄治、日澤雄介、松本祐子、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫)、国際部部長(佐川大輔)、日本の戯曲研修部部長(川口典成)、広報部部長(秋葉由美子)

- ① 演劇大学(inやまがた、函館、しまね)
- ② 国際演劇交流セミナー(台湾、韓国、スイス)
- ③ 日本の戯曲研修セミナー(in東京、福岡)
- ④ 若手演出家コンクール2018
- ⑤ 総会の進行について
- ⑥ 演劇センター構想

- ⑦ 教育出版部 演劇教科書について
- ⑧ 協会誌『D』21号 鼎談者の選定、各地域活動通信 アンケート内容の検討
- ⑨ 劇場との連携について
- ⑩ 《その他》DM(言葉の広場)、人事委員会、海外研修、フェニックスプロジェクト

◆2018年8月5日(日) 11時~13時

◆全体理事会

場所：芸能花伝舎A2

出席者：18名(委任8名)

大西一郎、坂手洋二、佐藤茂紀、扇田拓也、西川信廣、日澤雄介、松本祐子、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、監事(外波山文明)、東海ブロック(金子康雄、みなみ津姉)、関西ブロック(木嶋茂雄)、九州ブロック(大場久路)、国際部部長(佐川大輔)、日本の戯曲研修部部長(川口典成)、広報部部長(秋葉由美子)

- ① 総会の進行について
- ② 演劇大学(inやまがた、函館、大阪、しまね)
- ③ 国際演劇交流セミナー(台湾、韓国、スイス、アルゼンチン)
- ④ 日本の戯曲研修セミナー(in東京、福岡、東海)
- ⑤ 協会誌『D』21号 鼎談実施報告
- ⑥ 演劇センター構想
- ⑦ 《その他》自主事業について、劇場との連携について

◆2018年8月29日(水) 11時~13時

◆常務理事会

場所：協会事務所

出席者：10名(委任5名)

常務理事(坂手洋二、外波山文明、西川信廣、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、和田喜夫)、国際部部長(佐川大輔)、日本の戯曲研修部部長(川口典成)、広報部(乗原秀一)

- ① 演劇センター構想について
- ② 演劇大学(inやまがた、函館、大阪、しまね)

- ③ 国際演劇交流セミナー(韓国、スイス)
- ④ 日本の戯曲研修セミナー(in東京、福岡)
- ⑤ 若手演出家コンクール2018
- ⑥ 次年度の文化庁事業について
- ⑦ 次年度の自主事業について

◆2018年10月23日(火) 11時~13時

◆全体理事会

場所：芸能花伝舎3階フリースペース

出席者：12名(委任6名)

大西一郎、小林七緒、佐藤茂紀、西沢栄治、はせひろいち、日澤雄介、ふじたあさや、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、日本の戯曲研修部部長(川口典成)、広報部部長(秋葉由美子)

- ① 演劇大学(inやまがた、函館、大阪、しまね)
- ② 国際演劇交流セミナー(スイス、アルゼンチン)
- ③ 日本の戯曲研修セミナー(in東京、福岡、東海)
- ④ 若手演出家コンクール2018
- ⑤ 協会誌『D』21号、22号
- ⑥ 《その他》文化庁関連、アジア青空劇場フェスティバル、パリンピック関連、フェニックスプロジェクト、教育出版部について、演劇センター構想について、新年度新規事業について



戯曲の出版社に 突撃取材！

取材先…株式会社白水社 編集部

演劇業界と出版業界。

親密な関係にありながらもその交流はあまり表に見えてこない部分があります。

そこで今回、戯曲を出版している出版社へ直接取材をし、交流を深めてきました。

聞き手…篠崎光正・森原秀一
(取材…2018年9月21日)



演劇書を出版することになった
きっかけを教えてください

弊社(白水社)は1915年、福岡(福)易(やす)之助(すけ)によって創業されました。そして1921年、創業時から目指していた『模範(もはん)仏(ぶつ)和(わ)大(だい)辞典(じてん)』を出版することになるのですが、その執筆に関わっていたのが岸田(きしだ)國士(くし)さんでした。岸田さんはそのときの原稿料でフランスに留学、そこで演劇に魅せられ、帰国後、関係の深かった弊社との間で演劇関係の企画が生まれていったという経緯があります。

一方、白水社としても初めての演劇書として、1922年に鈴木(すずき)信太郎(のぶたろう)さんと辰野(たの)隆(たか)さんの共訳で『シラノ・ド・ベルジュラック』を刊行していた実績もありました。

ちなみに岸田さんは帰国後の1924年、フランス語で書いた戯曲『古い玩具』を自分で翻訳し発表したのが日本での戯曲デビュー作です。

演劇雑誌を
出版することになった
背景は？

戦前に『劇作』という劇作家の同人誌を刊行していて、それが演劇雑誌としての源流です。そして1951年、『演劇』という雑誌になり、この雑誌には岸田(きしだ)國士(くし)さん、小林(こばやし)秀雄(ひでお)さん、三好(みよし)達治(たてし)さん、内村(うちむら)直也(なおや)さんなど、そうそうたる方が執筆に関わっていました。さらにそれを受け1954年、『新劇』を刊行し、編集長として石澤(いしざわ)秀二(ひでじ)さんも関わっていました。

岸田國士戯曲賞の
意義について
教えてください

意義としては新人劇作家の顕彰です。そして出版社として戯曲を本にすることです。

戯曲は市場として成立しにくいのですが、受賞作だけは単行本にしようと考えています。

本の中には選考における選評を収録しています。受賞作の美点や意義、そして最終候補作に対する評価づけとして選評を毎年発表していくことで、演劇界の指針となる使命が本賞にはあると考えているからです。それはやはり岸田(きしだ)國士(くし)戯曲賞は進化を続けている最前線であるという自負があるからです。変わりゆく世界の中で、常に「どういう言葉が、今、なのか」「その時代ゆえのテーマ設定」を大事にする戯曲賞でありたいと思っています。選考委員の先生方もそこを意識していると思いますし、選評自体も読み応えのあるものになっていると思います。

最近、若い人が演劇書を
読まなくなったと言われます。
それについてどうお考えですか？

演劇書には戯曲と理論書があります
が、戯曲は意外と読まれていると思いま
す。ただ出版物としての市場が成立し
にくいのは皆さんコピーするから(笑)。

理論書に関しても、昔より理論を求
める風潮があるので、勉強ため、読む
人はいると思いますが、難しいという
印象があるのかもしれませんが。

一方、劇作家の立場から言うと、戯
曲というフォーマットが今の若い人た
ちには抵抗があるのだと思います。新
しい書き方を志す劇作家はみんな、小
説の方が抵抗ないということを知って
います。だから現在弊社で刊行中の
『新訳ベケット戯曲全集』もト書きを小
説風に仕立てました。これは20年前に
宮沢章夫さんの『14歳の国』という作
品で編み出した手法です。

今の演劇界に対して
思うことがあれば
聞かせてください

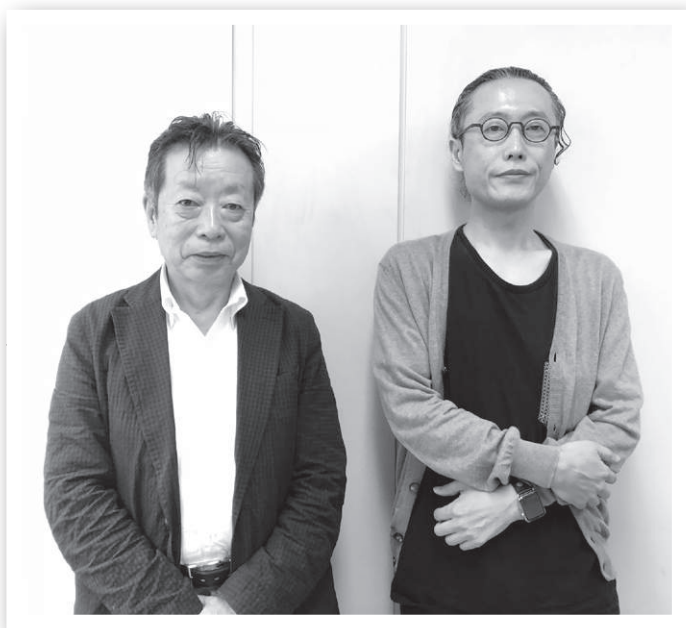
演出者が脚光を浴びる時代になって
ほしいと思っています。セゾン財団の
資料に「演出者には著作権がない」と
ありました。演出者の権利としてそれ
はおかしいという意見があるのはわか
るので、応援したいと思っています。

また最近気になっているのはハラス
メント問題です。演劇は教育の場で発
揮する力があるからこそ、ハラスメン
ト問題を解決することが必要だと考え
ます。演出者と言えは権力者、怖い存
在というイメージがあるからです。

また演劇に限らずですが、作家が自
分の生年を公表しない風潮はいかな
ものかと思っています。周りが公表し
ないからということと同調圧力になっ
ていると感じます。時代と表現は重なっ
ています。作品は後世に残るものなの
で、未来のために生年は公表すべきで
す。作家の生きた時代の経験を読み手
と共有するためです。

演劇関係者からの
プレゼン(例えばメソッド
の書籍化などは受け付け
ているのでしょうか？

もちろん受け付けますが、本になる
実現性は低いことはあらかじめ言っ
ておきたいです。なぜなら弊社は鴻上尚
史さん執筆の『演技と演出のレッスン』
など、すでにロングセラー、ベストセ
ラーになっている本があるからです。
とはいえ、ハードルは高いと思います
が門戸は開いているつもりです。



▲ 左：代表取締役社長 及川直志さん
右：編集部 和久田頼男さん



新入会員紹介

2018年10月末日現在（希望者のみ掲載）

☆一ノ瀬のり（いちのせ のり）



フリー。脚本家・演出家・演技講師。タレント活動を経て1995年に演劇法人テイク・ハート・カンパニー（後、劇

団不二野坐）に所属し舞台役者となるが、2000年にスタッフへと転身。主宰・演出家の小野不二野に師事し脚本・演出を学ぶ。以降、フリーにて劇団東俳を中心に多数のプロダクションにて新人俳優の演技指導・育成に力を注ぐ。2014年から「ichise企画」演技ワークショップにて様々なワークショップを企画・主催する。演出代表作は『まゆみのマーチ』『買一殺意の一線』がある。心が滲み出る空間づくりを心掛け演出しております。宜しくお願い致します。

☆岡田篤（おかだ あつし）



千葉県出身。福島県の私立「福島東稜高等学校」演劇部顧問。高校時代は水球部でしたが、大学の演劇サークルにて演劇の

扉を叩き、見事に心を奪われました。元来教員志望のため、おとなしく教育の世界に入り国語科教員として教壇に立ちました。が、幸運なことに赴任した学校に演劇部があり、めでたく演劇部顧問となりました。大会や地域ボランティアでの寸劇などの脚本を書いて生徒と一緒に演劇活動をしてい

ます。今回ご縁がありみなさんと一緒に活動させていただきます。七年前の震災の時は大変お世話になりました。福島は元気です。しかし、まだまだ終わってはいません。微力ながら福島の「今」を、舞台を通して発信していきたいと思っています。

☆しままなぶ



岩手県出身。大学合唱団にて合唱音楽を学ぶと共に、合唱劇、オペラ、シアターピースなど、空間演

出や身体表現を伴う音楽作品の創作に励む。その後演劇に取り組み、俳優活動から徐々に劇作・舞台演出へと活動の場を移行してきた。現在は、劇団やプロデュース公演による芝居を始め、オペラ、合唱劇の演出、また各種コンサートや声楽家のリサイタル等、音楽分野でも多数の演出を手掛けている。作・演出作品Ⅱオペラ『グスコブドリの伝記』（オペラシアター・こんにやく座）、合唱劇『賢治と嘉内』『銀河鉄道の二人』、合唱のためのシアターピース『あの日の空の詩』等々。音楽と言葉と身体と空間と。そして今という事と。

☆杉野じんべえ（すぎの じんべえ）



1974年9月26日生まれ。大阪府出身。一般社団法人劇団自由人会。趣味は全国の蕎麦屋さん巡り。

現在、演出家、脚本家、俳優として活動中。初めて書いた戯曲が舞台装置として形になって、俳優さん達に演じてもらった時は、言葉に言い表せない程の感動でした。私自身が俳優として初舞台に挑んだ時も、本番を迎えられた瞬間は感激したものです。しかし、初めて演出した時は、そういう類のモノを味わうことはなく、この歳になった今でも悩んでばかりです。今回の入会を契機に、先輩方から多くを学び、観客と共に自分自身にも感動を届けられるような演出家になりたいと願っています。これまでに演出した代表作は、ミュージカル『ゲイキヤさんのゆうれい』『夢をかなえるゾウ』『青春ロボット編』等。

☆小林俊一（こばやし しゅんいち）



福島県立ふたば未来学園高等学校で演劇部顧問をしています。顧問歴は二十数年ほどで、ここ数年来脚本・演出を部員と

共同で手がけています。現在の勤務校は福島県双葉郡で唯一開校している、東京電力福島第一原子力発電所にもっとも近い、震災後に生まれた学校です。集まってくる部員たちの価値観は様々ですが、自らの思いを表現・発信し、他者と共有の可能性を探りたいという認識では一致しています。福島島の「高校生というかぎカッコが外れるような舞台を」「福島の高中生とともに」「福島」の地からお届けするのが目標です。どうぞよろしく願っています。主な作品は『数直線』『あのひ、隠れたひ』（ふたば未来学園高校演劇部・部員との共同演出）。

☆鈴木茉美（すぎき まみ）



1984年1月30日生まれ、静岡県出身の演出・脚本家。劇団アレン座所属。大学で心理学を専攻、人間心理の深層を追

求し社会の中で起こる人間関係をよりリアルに描くことをモットーとしている。エンターテインメント作品にも関心を持ち、ある作品ではキャラクター性の高い登場人物を多数作り上げ、若い舞台ファンの女性たちからも支持されてきている。これらの作品はシリーズにもなっている。知識を蓄えることが好きで演出技術や心理学、歴史学、考古学など、幅広い分野の情報を常に取り入れている。残すべきもの、壊すべきものを見極めこれからの演劇界の続きを積み上げていきたい。代表作は『空行』『大正浪漫探偵譚』『YUKAI-DEN』。

☆島村和秀（しまむら かずひで）



1988年、埼玉県出身。劇団・情熱のフラミンゴ主宰。劇作家、演出家。世界レベルの舞台芸術を継続して創作するこ

とが私の演出家としての理念です。情報技術の進歩によって、日々の情報量は加速度的に増えています。そんな世界のスピードに対して演出家はどのような視座を持つべきなのだろうか？イタリアの諺に「どんな底なら穴を掘れ」というものがあるそうです。世界が描く天上大風に対して、穴を掘り『普遍』の水脈を見つけることが、僕の

演出家としての役割です。みなさま、志ばかりの若輩者ですが、どうぞよろしくお願ひします！

代表作品は情熱のフライング第5回公演『LOVE BATTLE FIELD』（於：五反田アトリエヘリコプター）。

☆所 奏（ところ かなで）



1977年生まれ、東京都出身。文学座演出部所属。玉川大学文学部芸術学科演劇コース卒業。文学座附属演劇研究所を

経て文学座座員に昇格。2017年文学座アトリエの会『青べか物語』（脚色、成井昭人）で初演出。その他、主な演出作品は『生きているものはいないのか』（文学座附属演劇研究所、本科57期昼間部卒業発表会）、『怪人二十面相』『妖怪博士』（共にキッズシアター、ボクとキミの秘密基地）、『オルケスタ・リブレ Days 三文オペラ2018』『Glich グリッチ』『夏の夜の夢』。大人向けから子供向けまで、ジャンルを横断した演出を継続していききたいと思っています。

.....

《退会》小西たくま 西田了 福正大輔

だんいっせい 猿渡公一 原田光

規 小田健也 西森良子 秦元樹

洪明花

《訃報》浅井克彦 千賀ゆづ子

理事・役員一覧

【理事長】流山児祥

【副理事長】坂手洋二、宮田慶子

【常務理事】大西一郎、小林七緒、シライケイタ、西沢栄治、日澤雄介、松本祐子

【理事・事務局長】和田喜夫

【理事】鶴山仁、菊川徳之助、鴻上尚史、佐藤茂紀、扇田拓也、田中孝弥、成井豊

西川信廣、はせひろいち、ふじたあさや、山田恵理香

【監事】外波山文明、福田悦雄

【評議員】瓜生正美、貝山武久、栗山民也、中村孝夫、福田善之

事業担当一覧

1. 演劇大学部 【部長】小林七緒

〈北海道〉齊藤歩 〈北陸〉井上ほーりん、黒田百合 〈東北〉佐藤茂紀、高橋純、新田満、吹雪ヒュン 〈関東〉スズキ拓朗、土田英生、成井豊、西垣耕造、日澤雄介

〈東海〉鹿目由紀、はせひろいち、平塚直隆 〈関西〉岩崎正裕、木嶋茂雄、高橋恵、山口浩章 〈中国〉坂井陽介、和田喜夫 〈四国〉岡田敬弘、吉本ちか子 〈九州〉大場久路、清末典子、五味伸之、高柳隆寛、山下キスコ、山田恵理香

2. 国際部 【部長】佐川大輔 【副部長】

広田豹 【担当理事】シライケイタ

〈北海道〉前田透 〈北陸〉岡井直道 〈関東〉

柏木俊彦、公家義徳、坂手洋二、佐々木治己、篠本賢一、島村和秀、杉山剛志、扇田拓也、林英樹、前嶋の、眞鍋卓嗣、

山上優 〈東海〉小熊ヒデジ、前川達次郎、丸知亜矢 〈関西〉坂手日登美、島守辰明、田中孝弥、中谷和代 〈九州〉石田聖也、五味伸之、山下キスコ、山田恵理香

3. 日本の戯曲研修部 【部長】川口典成

〈北海道〉田中春彦 〈東北〉大河原準介、渡部ギユウ 〈関東〉岩崎聡子、蔵人、黒川逸朗、黒澤世莉、小林拓生、坂手洋二、篠本賢一、外波山文明、中村孝夫、林英樹、日澤雄介、平野智子、松森望宏、丸尾聡 〈東海〉岡田一彦、菊本健郎、齋藤敏明、はせひろいち、みなみ津姉 〈関西〉井之上淳、笠井友仁、金子順子、神澤和明、菊川徳之助、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、山口浩章 〈九州〉石田聖也、五味伸之、田村さえ、山下キスコ、山南純平

4. 若手演出家コンクール 【部長】西沢栄治 【制作担当】三村里奈

〈関東〉大西一郎、扇田拓也

5. 広報部 【部長】秋葉由美子 【副部長】

栗原秀一 【担当理事】大西一郎

〈関東〉五戸真理枝、篠崎光正、中村ノブアキ、富士川正美、藤間健、緑川憲仁

6. 教育出版部

〈関東〉黒澤世莉、坂手洋二、佐々木治己、篠崎光正、篠本賢一、外波山文明、成井豊、日澤雄介、ふじたあさや、松本祐子、山崎哲史

7. 新事業企画部 【部長】鶴山仁

〈関東〉宮田慶子

8. 演劇センター推進部 【部長】西川信廣 〈関東〉鴻上尚史、坂手洋二、外波山文明、中屋敷法仁、流山児祥

一般社団法人 日本演出者協会 事業担当者名簿

2018年10月末日現在

〈関東〉鶴山仁、小林七緒、西川信廣

10. 日韓演劇交流部 【部長】シライケイタ

〈関東〉スズキ拓朗、村井雄

11. フェニックスプロジェクト 【部長】

大西一郎 〈東北〉伊藤み弥、こむろこうじ、坂田裕一、佐藤茂紀、渡部ギユウ 〈関東〉菅野直子

12. 観劇案内 【部長】遠藤栄蔵

〈東海〉金子康雄

13. 事務局

〈本部〉秋葉舞滝子、荒川貴代、上田郁子、清水直子 〈東海ブロック〉金子康雄

〈関西ブロック〉木嶋茂雄、山口浩章、山本つづみ

日本演出者協会の
Facebook ページは
こちらから！



または

日本演出者協会

検索



台湾通信～旅する演劇のすすめ～

流山 兎 祥

理事長就任時にも書きましたが私は「旅する演出家」です。本来、芝居者は定住民族に非ず移動民族（河原者）なのです。

何処へでも行って未だ見ぬ《他者》と出会い協働するのが演出家の仕事です。

私はいま三重の芸濃町や北海道の中標津で町民劇団創出の手伝いをしています。

福島では真船豊をテキストに老若男女が遊ぶ3年プロジェクトも始動しました。

台湾嘉義の3年コラボを終え、9月から来年1月にかけて、台北藝術大学で新作上演と大学院演出コースの教授で今年は7か月の台湾生活です。

あ、その前の8月18日～9月3日は『西遊記』（天野天街：作・演出）10年ぶりの中国@北京・成都・武漢3都市ツアーです。

流山兎★事務所は1991年『流山兎マクベス』ソウル公演以来、中国・韓国・インドネシア・タイ・イギリス・アメリカ・カナダ・エジプト・イラン・ロシア・ルーマニア・ベラルーシといった国々を旅しています。

2000年カナダエドモントン→ビクトリア→バンクーバー『狂人教育』フリンジ演劇祭ツアーの時、全員ホームステイの1か月を経験し、旅の面白さ＝劇団の面白さを知り、その後は毎年海外へ行っています。



ビクトリアでグランプリ受賞「世界演劇」の扉が開きロシア、中国、イランといった国々から次々と招聘が舞い込みました。

今では様々なネットワークが出来、世界と繋がっています。

私は若い演出家に「若いうちに世界へ往けよ、世界には面白いモノがいっぱい転がっている！」と言う事にしています。

実はこれは寺山修司さんから言われたコトバです。1980年「演劇団」解散時、寺山さんは「流山兎、世界を目指せ。これからは重賞レース(※)だ。パリでサーカス劇団を創れ！」と激励してくれたのです。

同年天井棧敷ニューヨーク@ラ・ママで名作『奴婢訓』やピーター・ブルックの演劇を観て「世界演劇の地平」に驚愕した32歳の私でした。



寺山修司、鈴木忠志、太田省吾のアングラ世代は30～40代に積極的に世界に飛び出しています。

私は50歳にして本格的に世界への旅を始め、同時に未知の演劇＝シニア演劇運動を始めました。

カネもメイヨも捨てて世界や高齢者という「他者」と遊ぶ愉悅。

エジンバラで鈴木忠志、シビウで串田和美といった先輩に、台北で柴幸男や鄭義信に出会う面白さ。

まさか70年代アングラ演劇を台湾で大学生に教えこらぶするなんて、40年前には想いもよらなかった事です。

だから、人生は面白い。

みなさん、是非、世界を旅してください。まずはフリンジから。

※ 競馬で、特に高額の賞金をかけて行われる特定のレースのこと。

Photo/ 流山兎★事務所+台湾嘉義 OUR シアター
2018 夏コラボレーション公演

王頌和：原作、流山兎祥：演出『嫁娘一牛車』
6月21日～7月1日@嘉義縣表演藝術センターで上演された。
撮影：黄慶哲

編集後記

▼3団体合同での公演を経験したり、『D』をきっかけに全国小劇場ネットワーク会議に出席したり、縦横の繋がりに勇気と刺激をもらう日々。繋がりを大事に、これからも成長・貢献していきたい。

(秋葉由美子)

▼先輩方と共に何かを作る。という事は、幸せな事だな……と改めて実感する今号となりました。当たり前だとは思わず、常に学んでいきたいと思っています。

(栗原秀二)

▼地球温暖化の影響が世界規模となり日本でも異常気象が猛威を振るう今、全世界で知恵を絞らなければならぬのと同様、演劇人口の激減する今、総動員で対応したい。

(篠崎光正)

▼部員が増えてきて、だんだん「劇団広報部」のような雰囲気になってきました。会員の皆さんだけでなく、社会に向けても協会の存在を発信していきたいです。

(緑川憲仁)

▼前号に引き続き、広報部員の皆様のお力添えのおかげでなんとか出来ました。本当に感謝の気持ちです。ありがとうございます。

(藤間健)

▼部員が増えて部会では偉そうにしていますが、ぶっちゃけ私も今春に加入した同期です。ばれないようにしたいと思っています。頑張ります。

(中村ノブアキ)

▼初めて紙面づくりに参加しました。次号の記事のアイデアを練る広報部での会議は、まるで演劇の未来を築く為の作戦会議のようです。

(戸真理枝)